

2007. 10  
k2 20 3 12

# 特集 大会講演

NHK学園は今年五回の短歌大会を開催しました。そのうち伊香保、熊野路田辺短歌大会の講演録をお届けいたします。岡井先生が、現代歌人を中心に取上げて解説する「私の好きな歌人たち」。森岡先生が戦中、戦後の時代を中心にお話した「自作を語る」。どちらの講演も大変興味深い内容ですので、ぜひおたのしみください。



●NHK学園生涯学習フェスティバル

演題 私の好きな歌人たち

講師 岡井 隆先生

熊野路田辺短歌大会

とき／二〇〇七年七月六日

ところ／和歌山県田辺市

演題 自作を語る

講師 森岡 貞香先生

伊香保短歌大会

とき／二〇〇七年五月十七日

ところ／群馬県渋川市



# 「自作を語る」

森岡 貞香

## 結核で療養中に歌を投稿

私は、こうした大勢の方の前で自分の歌について、なりたちからお話しするといふのは、初めてなのです。どんなことお話ししようか、夕べも寝ながら考えたのですが、もともと短歌を詠もうと思った動機は単純なことでした。

女学校に行っておりましたときに、三年生でした。バレエをしていて急に咳き込んだんです。変だなと思って、なにかちよつと血が出たような気がしたのですね。

でも、その日はそのまま終わりましたね、夜になりましたからもう一度そういうことがありまして、自分でも血だなと思ったのです。母がびっくり仰天してしまいました、その日からすぐに絶対安静で寝ることになりました。結局、レントゲンを撮ってもら

いましたら、胸の肺に影があるからということ、もう学校どころではなくて、毎日ただただ安静に寝ているということになってしまいました。現在のようによく薬もなにもない時代ですからね。

毎日寝ていまして、つまらないものから、母が少女雑誌のたぐいをいくつも買ってきてくれたのです。それを見ていましたら、「少女の友」というのがあったのです。投稿欄が多くて、短歌やら俳句、小さいエッセイなど、いっぱい出ているのです。それを見ているうちに、「こんなものならたいしたことないわ」と思いましたね。つれづれのままに文章の短い短歌とをはじめて作って、そして出しました。

出しましたら、どうなったか心配でした。ふた月の後に見る本に私のが取り上げられていたのですね。なんて簡単なのだろう、

たいしたことはないわと思ひまして、急いでまた作って出しましたら、今度はぜんぜん載らないのです。母が「やはり短歌はちゃんと勉強しなくてはだめ。あなた、竹柏会に入りなさい」と言うのですね。

ちよつと母が女学校の頃に竹柏会の「心の花」の第一号が出たのですが、その時に佐々木広綱先生とうちのおじいちゃんが大変懇意だったので、ご本をいただいて、それで竹柏会の「心の花」がずっと家に届いていたのだそうです。ですから、母は歌の話といえば竹柏会しか知らないのです。アララギも知らなければ何も知らない。

母は、私に読ませようと竹柏会に申し込んで、それで雑誌が来るようになりました。歌をお送りくださいと書いてあるので、早く出さないなんて言われて、なんだか五里霧中でめっちゃくちゃに作って送ったので

す。竹柏会の主宰者の弟さま、その方が私の原稿を見てくださったらしくて、添削されたのが返ってきたのです。

見ましたら、例えば「あるべかるける」というような朱が入っているのですね。これはどうも私の歌と違うわなどと思って、それでもお出しなさいと言われて、時々は出していたのです。

それが本当に、本当の初めてなのですね。竹柏会にも「心の花」にも、なつかしい思いを今も持っています。その時は、自分が一生短歌と歩いてゆくなどとは、夢にも思わなかった、そんな出発なのです。みなさんは歌が身近な存在になるのには、いろいろな動機があつてのことと思いますが、私の動機は本当につまらない、まったくありふれたことだったので。

### 夫の戦傷で歌が出てきた

病気で療養中ですから、学校を休学して、何かしてはいけない。当時はただただ安静だけが治療法でした。そうしているうちに、母のお知り合いで父の先輩に当たる方の奥様が訪ねていらした時に、母が「この人こ

のころ短歌をやっているけど、ぜんぜん駄目なのよ」と言ったのです。その奥様が「水甕」ですつと歌に関わっていらつしやうった方だったので。ご主人は、のちに陸軍大臣になられて、東京裁判で絞首刑になった方です。

「あら、私の雑誌に入った方がいいのではないかしら」とその奥様が言われて、それが「ポトナム」という歌誌だったので。入るも入らないもなくて、「ポトナム」も送られてくることになりました。とにかくそういうことで、二つの歌誌が来るようになったのです。

そのころは、もう歌に対する熱情というものは何とない存在で、あまり作らなかつたと思います。

ながいこと学校を休んでいまして、残りの学業を済ませましたら、「あなたは早くお嫁に行った方がいい」ということになりました。今の方はみんな職業におつきになります。当時は大方の女の人は職業につかなかつたのです。

それで割合早くに結婚して、まもなく戦争が始まつたのです。それは支那事変です。

北支の戦争で夫は瀕死の重傷を負つたのでした。その時は本当にびっくりしてしまつて気持ちが揺れて歌が出来たのです。それを「ポトナム」に送りましたら、事実が生々しいですからね、割合と人目を引く歌だったので。

当時、改造社から「短歌研究」という本が出ていて——この改造は戦時中に潰されます。それで「短歌研究」の版權を売つてしまつて、買取られた方から「短歌研究」が出版されるのですが——そこに「ポトナム」から引かれて私の歌が載つたのです。その雑誌が送られて来たときは本当にびっくりしてしまつて、でもこの先、長く短歌にかかわるとは思いもしませんでした。露さら思わなかつたのでした。

昭和十六年に大きな戦争が始まりました。幼い子どもがいました。とても歌どころではありませんでした。戦争が終わつて夫は帰ってはきましたが、終戦の翌春に亡くなつてしまいました。

### 歌集「白蛾」ができるまで

亡くなられたときに、小さい子どもはい

ますし、健康は余り自信がないし、私はこれからどうやって生きていこうかなと思いましたが。何か持っていないと駄目だ、何か持つものがあるかなあと考えてみると何もないのです。ただ、歌があるけれど、ものにならないと思つたのですが、でも一つでもあつたものに縋ってみようかなという気が起こつたのです。

その頃、神奈川県逗子に疎開をしておりました。戦争が終わつたので、夜には部屋に灯りを点しまして、そしたら山からものすごい蛾が来たのですよ。夜中、ガラスのところを羽ばたいていて、朝になったらみんな死んでいるですね。何といやらしい姿なのだろうと思ひながら、その蛾を見



ていると、私もこんなものかも知れないなと思ひましたね。この蛾を歌ってみようかなという気を起こしたので。それでその蛾を歌いました。

戦争から生きて帰ってきた父親にすぐに死なれた幼いわが息子、この小さい子ごとにかく一人前になるまで、生きていたい。もうどんなことになつても、かたわになつてもいいから生きていたいと思つたのです。それでその子を対象に歌つたのです。

それが昭和二十八年に『白蛾』という歌集になるのですが、自分では歌集を出すという事は考えてもいなかったのです。それまでの短歌に対する修練とか、短歌の技術的なこととかは、一切誰にも教わらなかったし、自分自身も考えることはなかったのです。ただ、やはり切羽詰つたときにね、何か一つ持っていないと生きていけないのではないかと思つたときに、手近にあつたのが短歌だったので。

戦争中に夫から手紙が来ましたが、私がちよつと短歌を詠むことなど思つて、夫は自分の短歌を書いてよこしましたが、私よらずと上手なんです。デッサンの絵も

入っていました。それを見ていたりして、やはり何か持つていなくては駄目だな、駄目だなというのは絶えずありました。初めの頃、「心の花」に少し歌を出していますが、いつの間にか立ち消えになつてしまつて、私はそんな出発なのです。

ここにいらつしやるみなさまは、どういふ動機で短歌をお作りになるようになったかわかりませんが、何かしらの動機がおありになると思うのです。私はちよつと敗戦の中で、夫に死なれ、体も弱い。行く先の目当てがないというときに、何か持つていなければと、ただそれだけでしたから、その歌を人に見せるとか、それを公のものにするなどということは考えもしなかった。ただただノートに書いていって、それを自分への鞭みたいにしていたのです。

そうしましたらね、世の中つて変なもので——話を飛ばしますが、胸部の病巣が悪くなつたのです。手術した方がいいと言われて、病院に入つておりましたときにね、ある出版社の人が突然訪ねて来られて、森岡さんの蛾の歌はすごい、と言うのです。その方が言われたことに頼の方の歌

集を出して、大変いい歌集だった。やはり何か一つ持っている人の作品集を出して行きたいので、森岡さんの歌集を出しましたと言うのです。私はとんでもないことだと思つて、お断りしたのです。病院に二度くらい訪ねていらつしやいましたが、二回ともお断りしました。

そしたら、普通、名前もない女の人で、そんな人に歌集を出してあげようなんてことは、稀有なことなのですよ、わかつているんですか、なんて言われましたね。わかっているかどうかなんて私は関係がなくて、そんなことする必要がないではないかと思ひました。でもその方が、退院してからもまたいらしたのです。それで、今までの歌をちよつと整理してみようかという気にはなつたのですね。そうして『白蛾』という歌集が出たのです。

### 作品は自分の裸の姿

思ひの他に、みなさまの評判が良くて、歌集は売り切れてしまいましたね。ただ、あとになって『白蛾』を見ましたら、自分が裸で町を歩いているような気がしたので

す。この歌集が売れるなんて恥ずかしい、嫌だなあとも思ひました。再版したいと言われましたが、再版はしませんと言つたのです。

話が前後しますが、歌集『白蛾』が出版されますときに——その時は東京に帰つておりまして、両親のところに戻つていたのですが——この歌集に小説家の帯文がほしいと出版元がいうのです。歌人はだめですよ、歌人の帯なんかついていたら一冊も売れません。小説家でなければ駄目ですと言つたのです。『白蛾』をご覧になつた方は見ていらつしやると思ひますが、三島由紀夫さんの帯が付いています。

どうして、と言われるのですが、三島由紀夫さんがまだそれほど有名ではない頃でいらしたときだったのでね。それからまもなく「仮面の告白」が出るのですが、本名は平岡公威というお名前で、私の家が平岡家とお近しかったのです。

ただ書いてくれる人で小説家といつたら、あの人しかいないけどどうだろうか。どうですかと言つたら、編集者は首をかしげていました。小説家ですかと聞くから、

これから大物になるかもしれない小説家だと言つたら、まあ、その人でもいいでしょうというので、三島さんに書いて下さるか頼んだら、「歌を作つていたの」と言われたのです。私が短歌を作つている人とは思つていらつしやらなかつたのですね。

そんな経緯で三島由紀夫さんの帯が付きましたね、ものすごく売れたのです。それは帯のせいとか、少しは中身のせいかよくわからないのですけどね。

読売新聞では、十返肇さんという文芸評論家を取り上げてくださった。私は寄贈はしていませんから、本屋さんで買われたのだと思ひます。そんなこともあつて、本当に飛ぶように売れてしまつたのです。

売れたときの自分の感じというのは、嬉しくはなかつた。自分でその歌集を見ますとね、先ほども申しましたが、自分が裸で町を歩いているような気がした。ああ、嫌だなあと思ひました。別に自分の裸体を歌つているわけではないのですよ。蛾に託して歌つていのですけどね。

私は右の胸の結核でした。幼い子がおり

ますでしょう、母親のそばに来たがりますね。もしも私から菌が出ていたら子どもに感染しますから、後ろからね、なんて言っていました。そういうような歌が『白蛾』の巻頭にあるのです。こんなに赤裸々に歌って、形は変わって、こういう歌は長続きはしない。やはりきっちりとした言葉の世界を開くような歌を詠んでいかなければ駄目ではないかと思ったのです。

### 歌集ごとに変化してゆく歌

拒みがたきわが少年の愛のしぐさ

頤せいかに手触り來その父のごと

昭和28年『白蛾』

この歌の「拒みがたき」というような言葉がよく効いていると言われました。この歌に続いて、後ろから子どもが来るという歌があるのですが、それもユニークですねと言われました。しかし、そうではなくてなくて、もしも私が菌が出ていたら大変ですから、なるべく子どもと正面から向き合っただけで抱っこするとかしなかったのですが、歌にそれは歌われていなければ、後ろから

子どもが来るということは歌っているのです。

みなさんも短歌を作られて、どういうところを省いて、どういうところを拾うかというの、歌の技術の前に、何故に歌うのかがなければ、歌そのものにはなかなか入れないと思います。それから長いこと歌を作っている経験で言うのですが、自分の中になにか歌いたいもの——外の景色を見ても景色をただ写生して、紅葉が美しかったとか、散って残念だとか、それは形だけなのです。

生いまい生となりしわが聲が将棋さして少年のお前に追ひつめられながら

昭和31年『未知』

息子が幼なかつた頃は、将棋の駒は勝負をするものではなくて、ただの遊び道具でしたが五歳頃からは一応のことは心得て盤上で母と駒を動かすようになりました。子供ごころにも懸命に母に勝とうとして、駒を動かしました。少しづつ強くなつてきて、私は手加減して、わざと負けたり、勝った

りしましたが油断ならぬ相手になり、いつしかに母を追いつめてゆく時の小さい息子の声は、わたしには嬉しいことであり、この歌の形は少年を歌うというよりも、その活気を受身の形で受けて心の満ちている歌です。

蒼白き馬を見し者居りしならむ濠をうづめし街ゆきながら

昭和39年『整』

戦後未だ間もない頃の東京の街の荒れようは凄じいものでした。銀座通りの辺りは、数寄屋橋の下を濠をつぶして、どこもかしこも泥んこ道でした。働く人はだれも泥んこ。辺りに穴も多くて通行の人が落ちたりしました。現在では想像もつきません状態でした。「蒼白き馬」は「死」ということで、用いられる言葉ですが、私もはじめて用いた言葉です。夕ぐれにその辺りを危なっかしく通っていて、この泥んこの街の夕べと、ぬかるみをよろよろと歩く人達。わたしもその中の一人。泥穴に落ちたりする人も少なくはなかつたその頃。

ゆふまぐれ二階へ上る文色なきとこ  
ろを若しかして雁わたる

### 昭和52年『珊瑚数珠』

自分では雁だと思うけれど、ほかの鳥かも知れないし、それから幻覚かもしれないし、そのところで雁が渡って行きますよというほど、明瞭ではないのです。東京の上を飛んでいくときにね。曖昧模糊として、見違いかもしれない。でも、それを言うのに、雁だなど自分で思った以上は、雁を出したいのです。それで「若しかして」という言葉を使ったのです。

これを四句に入れておくと、「若しかして」の歌なのです。「若しかして」という歌で、夕まぐれ、二階に上るでしょう。雁が渡ったかもしれない、もしかしたら違ったかもしれない。しかし、「若しかして」が四句に入ったことで、この歌は生きていくのです。夕まぐれ、二階に上る、雁が渡るのではあるまいか、などと歌ったらだめですね。それから「若しかして」がトップに入って、「ゆふまぐれ若しかして文色な

き」と言ったら、これまた説明的になってしまう。

この歌は、割と好きな方があって、私はそう好きではないのですが、よく引かれる歌なのです。五七五七七の後の七七の前の七に、「若しかして」が入ったことで、この歌は成り立ったのです。言葉の順番というのは難しいですよ。みなさんも、作った歌の言葉を入れ替えてごらんになる、入れ替えて読み直してみる、それによって前を少し直す場合も出てきます。歌がいろいろな形になってきて、面白いと思います。

歌を詠むという楽しみというのは、もちろん自分の日常茶飯事の中からですが、大変な出来事が毎日あるわけではありませんから、当たり前のことを歌わなければなりません。けれど、読んだ人が「ああそうね」と思ってくれなければなりません。それはやはりそこで使う言葉の出し方です。一句めに出すか、後で出すか、出し方が大切です。これは長いこと歌ってきて、経験で言えることなのです。歌の面白さ、歌を詠んでいく面白さのひとつもそこにあるように思います。

ただこれを見て、ああいいね、作ろうかなといったって、そんなにトントンできるものでもなし、いい風景にばかりぶつかるわけではないし、ありふれた風景でもいいから、そこで得た言葉を、順番をいろいろ変えてみて、そして作っていく。そういう癖が身に付くとですね、割合歌に入りやすいし、おもしろい歌が出来るのではないかと思います。

### 日常の言葉と短歌の言葉

もう一つね、私が言葉というものに関心を持ったのは、NHKがラジオからテレビに移ったとき。それまではラジオ一点張り、耳で聞いていたのが、絵が写るようになってラジオが成り立たなくなりました。その時にラジオの台本を書かないかと言われたのです。そういう経験がぜんぜんないので、私にさせてくれるのかしらと言ったら、そんな甘いことではなくて、ラジオがどうするかと困っていたときですからね、NHKの中で散々相談した結果、ラジオはディスクジョッキー一本槍の形で行こう、テレビに負けないでやれるのはそのくらい

ではないかということになったのです。それで台本を書く人を新しい人にしてみようというので、内々で募集していたのだそうです。

私の友達が、森岡さん、受けてみないと誘ってくれましてね。台本を書く仕事なら力仕事ではないし、手も汚れないし、言葉の世界で同じだから——こんなことを言うのも変ですが、当時のことで収入もいろいろのようです。それならやってみようかしらって、テストを受けたのですよ。偶然だと思のですが、受かったのですよ。

それから台本を書き出したら、大変。耳で聞いてわからなくてはいけません。テレビは絵が出ますから、言葉が少しくらいおかしくても通るでしょう。私の引き受けたのが実用番組だったので。たとえば「託児所の実態」とかね。そうするとそこへ行って録音を取って来てつなぐわけですが、聞いている人のお役に立つという番組なのです。

今の天皇様の御結婚のお馬車の行列がテレビに写るといので、そのためにみんなテレビを買ったという時代です。その頃、

初めて洗濯機が入ったのですよ。「洗濯機の実態」という番組で家庭のみなさんにお知らせするのありました。

そういう番組の台本を書くとなると、音を取って来なくてはならない。音を録音してきて、それに説明を加えて、テレビと対抗するわけです。これが案外難しいのですよ。どうしたらいいかと思ってね、そのとき初めてね、言葉とは何だと思つたのです。

踊り子は舞台で踊ってここまで行くでしょう、歩行の形ですよ。だからと言って目的があつていくわけではない。ポストに手紙を出しに行こうと思つて行く歩みも、舞台の上で踊り手が行くのも、足と格好は同じ、同じ運動に見える。ところが、片方はここからここまで踊りですから、こつちはポストに行つて入れなければ仕事にならない。言葉というのは、舞踏と何とかというふうによく言われるのです。実用番組は日常の役に立つてわからなければ駄目なのです。詩的なことで、夢のようなことを言つていては駄目なのです。

たとえば「洗濯機が買えて嬉しくて心が躍るわ」なんていうのは駄目なんです。ガ

ツチャンガツチャン音がして、「ああこんなに綺麗に洗濯が出来たわ」という形で入らなければ駄目なのです。自分の歌の言葉と、実用的に役に立つ言葉と、それから実用的には役に立たないけれど、短歌という中では十分役に立つ言葉と、難しいことなのですけど、台本を書いていたときにその見分けがわかるような気分があつたのです。

台本書きは、何年間かやりましたが、この仕事を長くつづけていると歌が潰れると思つたので、数年で止めました。収入にはなりましたね。(笑)

短歌の中で見える言葉は日常生活では役に立たなくていいのです。短歌の中で役に立つ言葉であつて。難しいことですが、それがわからないと、なかなか歌はできません。みなさんも少し苦心してみてください。自己流の話でしたが、本音をお話したつもりです。